

農作物技術情報 第1号 花き

発行日 令和8年3月19日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当(電話 0197-68-4435)

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ りんどう 春の株管理と施肥を適期に実施しましょう。
前年の秋にできなかった残茎を除去しましょう。
- ◆ 小ぎく 定植時期に合わせた計画的な親株・育苗管理を行いましょう。
親株から育苗期の病害虫防除を徹底しましょう。

りんどう

1 生育状況

融雪が早かった県南部では萌芽が始まっています。一方、積雪の多かった地域では、ほ場にまだ雪が残っています。融雪時期の違いから萌芽・展葉の初期生育は、地域により差がみられる見込みです。

2 圃場管理

(1) 融雪促進対策

ほ場に雪が残っている場合は、融雪を促進する手段として炭の粉を散布する方法があります。散布後に降雪があると効果が劣りますので、散布するタイミングに注意します。

(2) 株の保護

昨年定植した株や極早生品種などは根張りが弱い傾向にあり、冬期間に株が浮き上がっている場合があります(図1)。ほ場を見回り、見つけた場合はいねいに埋め戻し、周りの土を寄せて株を保護します。

また、マルチを除去しているほ場では、畝の肩部分が崩れて根が露出することがあります(図2)。見つけたら早めに土寄せを行い、塊茎や根を保護します。



図1 冬期間に浮き上がった株



図2 畝が崩れて根が露出した株

3 残茎除去

前年に取り残した株元の茎は、リンドウホソハマキの幼虫やハダニ類が越冬している可能性があります。暖かくなって動き始める前に除去します(図3)。併せて、地表に落ちている前年の花茎などの残さも拾い集めます。いずれも、必ずほ場外で処分します。



図3 残茎の除去（左：除去前、右、除去後）

4 施肥

(1) 施肥量

春の基肥は、専用肥料を用い萌芽期頃に施用します。特に、極早生種や早生種は、施肥の遅れによって草丈不足など品質に影響することがあるので、早めの施肥を心がけます。

施肥量は窒素・リン酸・カリで各 10～12kg（10 a 当たり成分量）が基準ですが、土壌診断の結果や鶏ふん・豚ふん等の堆きゅう肥の施用量、また、前年度の生育等も参考にしながら決定します。

(2) 施肥方法

近年は、雑草対策のためマルチを剥がさず温存する例が多くなっています。この場合、植え穴への施肥は株に肥料が乗りやすく肥料焼けを起こすことがあるため、条間への施用やマルチの一部を切って施用するなど株に直接肥料が触れないようにします。

5 育苗（ハウス）

(1) は種後の管理

育苗は温度管理と水管理がポイントです。適切な管理を心がけてください。

特に、出芽ぞろいまでは適温確保に努め、短期間で出芽ぞろいを目指します。その後は徒長を避けるために温度を下げるとともに、適宜換気を行い締まった苗を作ります。

かん水は、夕方の段階で培土の内部には水分があるものの、表面は乾いている状態が理想です。当日の天候や苗の大きさ等により、かん水の時間帯、回数、かん水量を加減します。

なお、苗数の不足が懸念される場合は、2次根発根前に早めに間引きを行い、間引いた苗を別のセルトレイに移植して、予備苗を確保します。

(2) アルタナリア菌による苗腐敗症の予防

育苗期に発生するアルタナリア菌による苗腐敗症は、種皮に付着した病原菌が伝染源となり、子葉で発病した後、本葉に伝染します。適用殺菌剤による種子消毒に加えて、本葉2対葉目が出始める時期に薬剤散布することで、以降の病勢進展を抑制します（図4）。



図4 薬剤防除開始時期（本葉2対葉の出始め）
※子葉に苗腐敗症発生

6 定植ほ場

これから定植予定のほ場に堆肥を入れる場合は、定植間際とならないようできるだけ早めに施用し耕起しておきます。また、排水不良ほ場では、畦畔の内周に明きよを設置する等の対策を講じます（図5）。

また、りんどうこぶ症の発生が多い地域や前作で発生がみられたほ場では、発生のリスクを減らすため、畦畔の内周に明きよを設置するようにします。



図5 畦畔内周の明きよ

小ぎく

1 生育状況

2月中旬以降、気温が平年より高く推移したことで、親株摘心後の側枝は順調に伸びており、採穂作業が始まっています。挿し芽の時期は例年並みとなる見込みです。

2 挿し穂の冷蔵

親株の生育が早まり、定植までに穂の老化が心配される場合や、数回分採穂したものをまとめて挿したい場合は、挿し穂の冷蔵が有効です。

手順例は以下のとおりです。

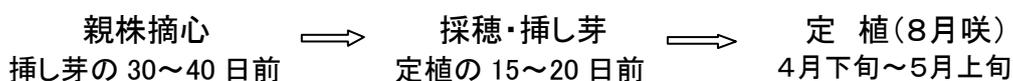
- ① 採穂した穂を、日陰でややしんなりするまで水分を飛ばします。
- ② 穂をそろえ、束ねて新聞紙で包みます。これを小さめのポリポット等に立てた状態とします。
- ③ 束ねた穂を冷蔵庫に入れます。この時、冷蔵庫の冷風が直接当たらないよう箱に入れるか新聞紙等で覆います。
- ④ 2～3℃で20～30日程度貯蔵可能です。庫内は温度にムラがあるため、設定温度ではなく必ず温度計で確認します。
- ⑤ 出庫後は傷んだ穂を除いたのち、切り口の切り戻しをせずにそのまま挿し芽を行います。



図6 家庭用冷蔵庫を利用した穂冷蔵

3 育苗（挿し芽）

8月咲品種では、品種に応じた所定の定植時期に適期苗が定植できるよう計画的な作業に努めます。老化苗は開花期や切り花品質に影響するため、作業スケジュールや育苗管理に留意します。



挿し床の温度は15～20℃が最適で、培土の水分は多すぎない方が早く発根します。また、挿し芽後はしおれを防ぐために遮光しますが、徐々に光にあてて徒長や葉の黄化を防止します。温度・水・光管理を適切に行い、20日間以内の育苗期間を目標とします。

9月咲品種の挿し芽時期は、5月上旬以降が一般的です。親株の生育が進んでいる場合は、軟弱な生育や側枝の伸びすぎを避けるため、日中はハウスのサイドと入口を開放して適温管理を心がけます。また、過かん水を避けて軟弱徒長を抑制します。

また、気温の上昇とともに親株の白さび病やべと病等の発生が増加しますので、換気によりハウス内の湿度を下げるとともに、定期的に薬剤防除します。

4 定植ほ場

これから定植予定のほ場に堆肥を入れる場合は、定植間際とならないようできるだけ早めに施用し耕起しておきます。また、排水不良となりやすい水田転換畑では、高畝や明きよなどの排水対策を講じます。

5 病虫害防除

上述のとおり、病害で最も注意が必要なのは白さび病とべと病です（図7）。日中の換気と適切なかん水に加えて、例年発生がみられるハウスでは、薬剤を定期的に予防散布します。

また、害虫ではアブラムシ類やハモグリバエ類、アザミウマ類に注意します。親株からの持ち込みにより、育苗期に発生がみられることもあります。発生初期に薬剤を散布するとともに、採穂時に親株をよく観察し、健全な穂を選びます。



図7 定植直後の白さび病発生の様子
※挿し穂からの病気持ち込みによる

共通

1 肥料コストの低減に向けて

令和4年に急騰した肥料価格はその後低下傾向にありますが、依然として高止まりが続いています。このため、土壌診断に基づく適正施肥や、たい肥などの有機物の活用、施肥量低減技術の導入、肥料銘柄の見直しや調達方式の改善等により、コスト低減に努めましょう。

岩手県では、肥料コスト低減に向け、下記のマニュアルを発行し、岩手県ホームページに掲載しています。是非一度、お手持ちのパソコンやスマートフォンから確認してください。

岩手県肥料コスト低減対策マニュアル（令和4年1月）

https://www.pref.iwate.jp/agri/res/projects/project_agri/page/002/004/581/hiryoukosutoteigen0406.pdf

山火事防止運動実施中！ [2月26日 ~5月31日]

「山火事を起こすも防ぐも私たち」

春先は野山が乾燥し、風の強い日が多くなります。林野火災の多くは人為的な原因で発生していますので、野外での火の取扱いには十分注意しましょう。

次号は4月23日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。